

読み聞かせボランティアへの継続的な参加による 読み手の発達過程

鈴木 大介¹⁾・勝 眞 瞳²⁾・
稲 木 隆 一¹⁾・扇 原 淳³⁾

Human Development through Volunteer Activities involving the Reading of Picture Books

This study aimed to clarify the mechanism and effects of continuous participation among readers in a volunteer activity involving the reading of picture books.

Picture books selected by volunteers were compiled, and the reasons for their selection were examined in an interview survey.

Three volunteers who belonged to Group B in elementary school A participated in focus group interviews. The results suggest that volunteers tend to choose books that elicit laughter in children.

The research also clarified the developmental process in the attitude of the participating volunteers through interviews.

One volunteer participated in a semi-structured interview. A written, verbatim record was obtained and a Trajectory Equifinality Model (TEM) was conducted.

The results of this study suggest that continuous participation in volunteer activities involving the reading of picture books contributes to the acquisition of a sense of generativity through various human relationships.

【背景・目的】

読み聞かせとは、様々な年齢を対象に読み手が聞き手に読書材を読みすすめていくことであり、同時に絵を提示する場合もある行為である¹⁾。また、絵本の読み聞かせは、文字で書かれた物語を大人が読み、子どもは耳でそれを聞きながら本に描かれた絵を見ていくというメカニズムをもった言語活動である²⁾。

読み聞かせは、読書材と読み手、聞き手が存在すれば、誰でも行うことができるという簡便さやその教育的効果から、多様な場所で幅広い世代の

聞き手を対象に実践されている³⁾。絵本の読み聞かせの意義は、読み手と聞き手が絵本の読み聞かせを一緒に楽しみ、ともに創造的な活動を展開することとされている³⁾。絵本の読み聞かせを通して、聞き手は言葉や文字を獲得するのみならず、読み手とコミュニケーションを図る⁴⁾。親子間での読み聞かせでは、前頭連合野の活性化が相互コミュニケーションをもたらすと指摘されている⁵⁾。このように、幼少期の子どもにとって様々な役割を担うツールの一つである絵本が、近年読解力や読解方略といった読みのリテラシー獲得を目指す教材として評価され、小学校教育に採用されている⁶⁾。2001年には、「子どもの読書活動の推進に関する法律」第2条により、子どもの読書活動の環境整備の推進が求められたことに起因し、読み聞かせボランティアが盛んに行われるようになって

1) 早稲田大学大学院人間科学研究科

2) 早稲田大学人間科学部

3) 早稲田大学人間科学学術院

た⁷⁾。ボランティアによる読み聞かせに関連して、聞き手の発達に着目した研究として、読書意欲の増進や語や文の理解の推進等⁸⁾が報告されている。

しかしながら、そもそも読み聞かせボランティアではどのような絵本が選択されているのか、何故その本が選ばれてきたのかについて検討したものはあまりない。また、ボランティア活動については、日本政府も推進しており、企業等で働く者、主婦、退職者等の成人に対して、これまでに培った知識や経験を生かして様々な活動を行うことが、自己の存在意義を確認し、生きがいにつながることや、市民の一員として、新たな「公共」を支える担い手となることが期待されている⁹⁾。このことも背景にして、今後、より多くの地域住民の社会参加が進むことが予想されるが、こうした読み聞かせボランティア団体の絵本選択の実態について明らかにすることは、新たに組織・展開される読み聞かせボランティア団体・個人に対して、ひとつの参考資料を提供するという意味でその価値は大きい。

一方、近年では、絵本の読み聞かせをコアにした世代間交流の成果が報告されている¹⁰⁾。ここでは、読み手であるボランティアの主観的健康感や社会的サポート・ネットワークの増進や地域共生意識や体力の一部に効果があることが報告されている。

これまでのボランティアの効用についての研究は、主観的健康感や生理指標、心理尺度が用いられてきた。しかしながら、ボランティア活動がもたらす効用のプロセスについては、当然ながら個別性があることが予想できるが、具体的にどのようなプロセスを経るのかについての蓄積は前者のような研究に比べて少ない。ボランティアの発達過程を明らかにすることは、多様な人間の発達の理解につながると考えた。

また、保護者が自身の子どもが通学する地域の学校で行うボランティア活動によって、子どもや学校とのつながりの中で、保護者自身がどのように発達し、またそれがどのように意味づけられる

のかについて検討することは、家庭教育のあり様を考える上でも重要であると考えた。

そこで、本研究では、埼玉県内A小学校（以下、A小学校）で読み聞かせボランティアを行っている団体Bを対象に、選択された絵本の分類とその理由、及び読み聞かせボランティアの継続的な参加による読み手の発達過程を可視化することを目的とした。

【対象団体・ボランティア】

A小学校にて、絵本の読み聞かせボランティアを行っている団体Bを研究対象とした。団体Bは2001年の発足当時、全国的に読み聞かせボランティア活動が開始されたことを背景として、保護者らによる要請で読み聞かせボランティアを実現するに至った。2019年現在、メンバーは15名であり、同校に通学している児童の保護者、及び同校を卒業した児童の保護者で構成されている。同団体はこれまで、毎週木曜日の8時25分から約15分間、低学年を中心とした全学年の児童らを対象に、原則1学級に1名の読み手が絵本の読み聞かせ活動を行っている。また、毎週の活動終了後に図書室にて反省会を行い、活動記録への記入、参加者同士の交流を通じて、活動の振り返りを行っている。

【方法】

【研究Ⅰ：読み聞かせボランティアによる絵本選択とその選択理由】

本研究では、A小学校で絵本の読み聞かせを行っている団体Bを対象に、具体的にどのような絵本がどの学年で読まれたのかについて明らかにすることを目的とした。方法として、団体Bが、2011年から2016年の間に読んだ絵本の記録から、年月日、タイトル、学年情報を集計した。そして、同団体に所属するボランティア3名を対象として、集計したデータに基づき、上位であった絵本の選択理由について、表1のインタビューガイドをもとにした面接を30分程度実施した。対象者の活動

表1 研究Ⅰのインタビューガイド

番号	質問内容
1	「ほげちゃん」が低学年で上位になった理由を教えてください。
2	4年生から「あらま！」が上位になった理由を教えてください。
3	どのようにして日頃絵本を選んでいるのか教えてください。
4	この団体独自の人気な絵本を教えてください。

表2 インタビュー対象者の属性と活動年数

対象者	性別	年代	活動年数
A	女	40代	6年
B	女	50代	11年
C	女	40代	10年

表3 研究Ⅱのインタビューガイド

番号	質問内容
1	読み聞かせボランティアに参加した動機を教えてください。
2	参加していて読み聞かせに対する意識が変わったエピソードがあれば教えてください。
3	他の保護者の方との関わり方を教えてください。
4	読み聞かせボランティアをきっかけに、成長を感じたことがあれば教えてください。

年数、年代等は表2に示す。面接は、フォーカス・グループ・インタビューの形式をとり、A小学校の図書館で行った。なお、フォーカス・グループ・インタビューとは、具体的な状況に即したある特定のトピックについて選ばれた複数の個人によって行われる形式ばらない議論とされている¹¹⁾。また、全ての参加者に類似の具体的な経験をしていることが重要とされている。

【研究Ⅱ：読み聞かせボランティアへの継続的な参加による意識の変化】

団体Bに所属するボランティア1名（研究ⅠのボランティアA）を対象に、読み聞かせボランティアが自身にとってどのような意味があったのかについて、表3のインタビューガイドをもとにした半構造化面接を30分程度実施した。面接は、個人面接の形式をとり、A小学校の図書室で行った。面接における対話は、対象者の承諾を得たうえで、ICレコーダーに記録し、録音内容を逐語録として

起こしたのち、ラベルを作成した。

分析方法には、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：TEM）を用い、対象者の経験を可視化した。TEMは、人間を開放システムとして捉えるシステム論に依拠する点、個人に経験された時間の流れを重視する点の2点を特徴とした研究方法であり、近年多くの研究で採用されつつある分析方法のひとつである¹²⁾。人間の具体的な経験に関心をもち、個人の人生を時間と共に描くことで、時空、文化と共にある人間のあり方そのものを記述することがTEMの目標である¹²⁾。TEMで用いる用語解説を表4に示す。

TEM図作成の手続きに関しては、1回目の面接で作成した逐語記録をもとに、KJ法¹³⁾を用いて文章化を行った。文章化されたストーリーをもとに、TEMの概念にもとづき分岐点（BFP）、等至点（EFP）、必須通過点（OPP）を設定した。作成したTEM図については、インタビュー対象者と確認作業を行い、分岐や意味の解釈に関して確

表4 TEMで用いる用語解説

用語	意味
等至点(EFP)	多様な経験の径路が一旦収束する地点
両極化した等至点(P-EFP)	等至点を一つのものとして考えるのではなく、それと対になるような、いわば補集合的な事象も研究に組み入れ、意図せぬ研究者の価値付けを未然に防ぐ
分岐点(BFP)	ある選択によって、各々の行動が多様に分かれていく地点
必須通過点(OPP)	理論的・制度的・慣習的にほとんどの人が経験せざるを得ない地点
社会的方向付け(SD)	個人の望む選択肢ではなく、望んでいない特定の選択肢を選ぶように仕向ける、環境要因や文化的な力の総称
社会的促進(SG)	SDに対し、個人の望んでいる行動や選択肢を選ぶように支援する、環境要因や文化的な力の総称

参考文献¹²⁾をもとに筆者作成

表5 読まれた絵本ののべ冊数と読まれた回数の多かった絵本

学年	のべ冊数	読まれた回数が多い絵本(()内は回数)
1	427	ほげちゃん(12)、オニじゃないよおにぎりだよ(7)、しあわせならてをたたこう(6)、ぼうしとつたら(5)
2	314	ほげちゃん(4)、ぼうしとつたら(4)、ほげちゃんまいごになる(4)、へんしんクイズ(4)
3	169	オニじゃないよおにぎりだよ(4)、ふしぎなふしぎな小学校(3)
4	90	あらまっ(2)、ねえどれがいい?(2)、とりかえっこ(2)、りんごかもしれない(2)、いいからいいから(2)
5	41	あらまっ(2)、ねえおきて(2)、りゆうがあります(2)
6	11	りゆうがあります(2)、Three Little Pig(2)

認した。

今回、中澤らによる発達と類似した概念の整理¹⁴⁾を参考にした。発達と類似の概念として、成長や成熟があるが、発達は、誕生後のさまざまな機能的、構造的な変化で、量的な変化よりも質的な変化に注目していること、成長は、誕生後の身体の骨格的变化の増大、量的な変化を表していること、成熟は、生理的なプログラムにしたがって順調に育っている状態、と整理している。本論文では、この発達の考え方に則った。

なお、研究Ⅰ、研究Ⅱを実施するにあたり、個人情報保護への配慮、研究協力の自由意志、研究辞退方法、不参加による不利益が生じないことを口頭と文書にて説明し、許諾を得た。

【結果・考察】

【研究Ⅰ：読み聞かせボランティアによる絵本選択とその選択理由】

集計の結果、2011年から2016年の間に読まれた

絵本は計688タイトル、のべ1052冊であった。学年ごとに読まれた絵本の、のべ冊数と読まれた回数の多かった絵本を表5に示す。

主な結果として、低学年では、『ほげちゃん』、『オニじゃないよおにぎりだよ』といった子どもが喜ぶ絵やストーリーの絵本が選択されていた。高学年では、『あらまっ』、『りゆうがあります』といったストーリー性のある絵本が選択されていた。

インタビューの結果、1・2年生で『ほげちゃん』が1位となった理由としては、読み手の間で面白いという評判が広まったためであった。4・5年生で1位であった『あらまっ!』については、ストーリーが長く、展開があり、中学年、高学年の児童が良い反応を示すことがその理由として聞かれた絵本選択の理由としては、他のメンバーから勧められた絵本を選ぶという回答が見られた。インタビューで対象者の言及のあった絵本の概要をインターネットサイト『絵本ナビ』を参考に筆者が作成し、図1に示す¹⁵⁾。

「ほげちゃん」

作：やぎたみこ 出版社：偕成社 発行年：2011 年

内容：青いカバのようなぬいぐるみのほげちゃんの物語。ゆうちゃんのお家に送られてきてから家族の一員として、様々な出来事に遭遇する。「ほげちゃんまいごになる」や「ほげちゃんとペロ」などシリーズ化されている。

「あらま!」

作：ケイト・ラム 訳：石津ちひろ 出版社：小学館 発行年：2004 年

内容：眠らない孫とおばあちゃんのやりとりが愉快なナンセンス絵本。早く寝なさいと言われても屁理屈を言ってなかなか寝ない孫に対し、おばあちゃんが「あらま!」と言ってありえない方法で対抗する愉快な掛け合いが特徴。

「オニじゃないよおにぎりだよ」

作：シゲタサヤカ 出版社：えほんの社 発行年：2012 年

内容：おにぎり好きのオニたちが、人間に美味しいおにぎりを教えてあげようと人間の街に出て奮闘するお話。オニたちの少しずつれた頑張りが子どもにもうける。

「しあわせならてをたたこう」

作：デビッド・A・カーター 訳：きたむらまさお 出版社：大日本絵画 発行年：2003 年

内容：仕掛け絵本。「しあわせなら手をたたこう」でおなじみのアメリカ民謡に合わせて、つまみを引くと様々な動物の体が動くようになっている。

図1 インタビューで対象者に言及された絵本の概要

参考文献¹⁵⁾をもとに筆者作成

絵本選択の傾向に関して、低学年と比較して、高学年の方が選択された絵本に多様性が見られた。鈴木によると、保育養成課程学生の絵本選択では、言語表現を重視した道徳的諸価値を問う絵本を選択する傾向にあった¹⁶⁾。本研究では、保護者の絵本選択を対象としているが、読解力向上や道徳的価値の理解など、一定の学習目的を意識した選書でなかったことが、絵本選択の多様性に影響したと考えられた。

絵本選択の基準として、「聞き手の笑いが起こる絵本」をボランティア全員が重視していた。今満らによると、集団での絵本の読み聞かせにおける読み手の絵本選択では、経験者は未経験者に比べ、読み聞かせ中の子どもの様子をもとに、絵本を選択する傾向にある¹⁷⁾。また、八木は、学生による絵本選択の基準として、自身の幼少期の読書経験を重視し、絵本の絵や文章を元にした選書が多く、聞き手である幼児の想定した選書が少ない傾向にあることを指摘している¹⁸⁾。本研究では、育児経験のある保護者が、読み聞かせ経験時や他の保護者から伝え聞いた子どもの様子を絵本選択に反映し、聞き手が良い反応を示すと想定される絵

本を選択したと考えられた。また、笑いを誘発することを意図した絵本が選択された理由のひとつに、学校における一日の始まりを、笑顔でスタートさせてあげたいという思いがあったのではないかと思われた。また、情動伝染により、読み手自身も笑いを感じ、笑顔になるといった循環が生じている可能性が考えられるが、その点については、今後、生理学的な観点からの検証が求められる。

【研究Ⅱ：読み聞かせボランティアへの継続的な参加による意識の変化】

【ジェネラティブティの獲得】を最終的な等至点として、必須通過点から分岐した対象者の経験を可視化し、図2に示した。読み手のジェネラティブティ獲得の過程を、第1期として<読み聞かせボランティア参加の判断期>、第2期として<読み聞かせを通じた繋がり形成期>、第3期として<親としてのスキルの獲得期>に整理した。

なお、【ジェネラティブティの獲得】を最終的な等至点として定めた理由は、対象者がエリクソンのいう成人期に該当すると考えられること、絵本の読み聞かせボランティアによってもたらされ

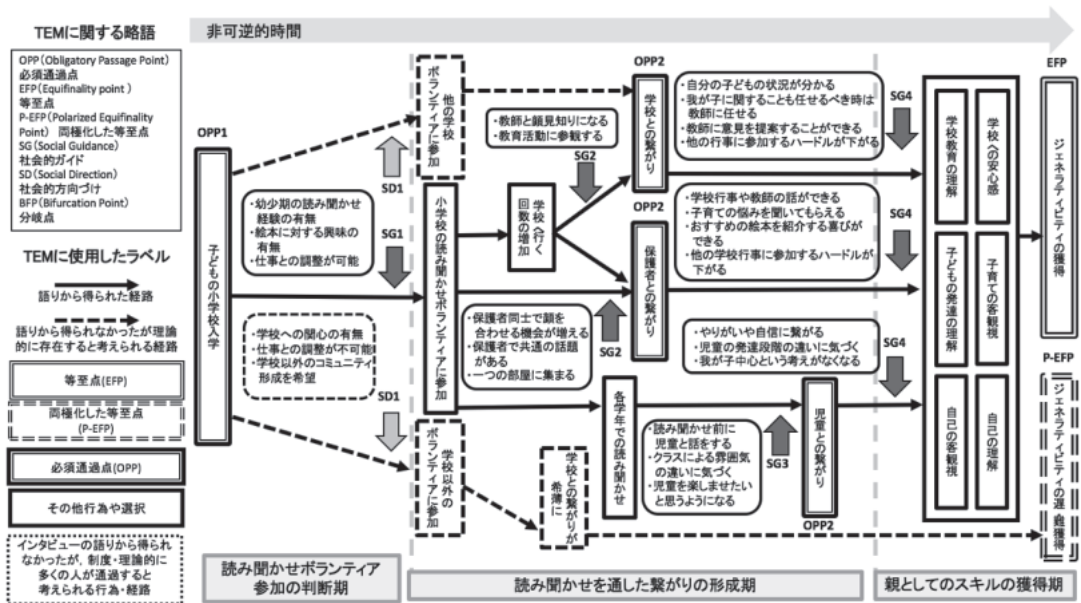


図2 読み聞かせボランティア参加者のジェネラティブティ獲得

る他の児童や保護者、学校とのつながりが、「広く次世代を育て世話をする」という意味で、ジェネラティブティの獲得をもたらすと考えたことによる。「ジェネラティブティ」とは、エリクソンの造語であり、「次世代を導き確立することへの関心」を「ジェネラティブティ」と名づけ、中年期の心理社会的発達課題とした²⁰⁾。また、現在では、広く次世代を育て世話するという概念を含むものとする立場から、丸島・有光による「世代継承性」や丸島による「世代性」という訳語が用いられているとされている¹⁹⁻²¹⁾。そこで、本研究では、「広く、次世代を育て世話をする」ことをジェネラティブティとし、合わせてその獲得を発達として分析を行った。なお、ボランティアを志向した時点で、すでにこのジェネラティブティを獲得しているという考え方もある。今回は、このジェネラティブティについて、あるかないかだけではなく、その質的な充実も含む視点で分析を行った。

読み聞かせボランティア参加の判断期

第1期では、必須通過点 (OPP) である【子ど

もの小学校入学】から、【小学校の読み聞かせボランティアに参加】までに焦点を当て、「読み聞かせボランティア参加を判断」に至るまでの対象者の経験をTEM図によって可視化した。SG1である【幼少期の読み聞かせ経験の有無】、【絵本に対する興味の有無】、【仕事との調整が可能】の影響を受け、【小学校の読み聞かせボランティアに参加】へと至っていた。一方で、SD1である【学校への関心の有無】、【仕事との調整が不可能】、【学校以外のコミュニティの形成を希望】の影響を受け、【他の学校ボランティアに参加】、【学校以外のボランティアに参加】へと至っていた。

中高年のボランティア参加に関して、宍戸は、中高年のボランティア活動参加の促進要因として、子どもが小学生の時から現住所に居住していることを指摘している²²⁾。本研究では、子どもを通じて読み聞かせボランティアに参加することもあったが、【学校以外のコミュニティの形成を希望】の影響を受け、【他の学校ボランティアに参加】、【学校以外のボランティアに参加】へと至ることもあった。ボランティア参加に関して、小学校の

学区に居住することが必ずしもボランティア活動参加の促進要因になり得ないことが示唆された。

読み聞かせを通じた繋がり形成期

第2期では、【小学校の読み聞かせボランティアに参加】してから、必須通過点（OPP）である【学校との繋がり】、【保護者との繋がり】、【児童との繋がり】を経験するまでに焦点を当て、「読み聞かせを通じた繋がり形成」に至るまでの対象者の経験をTEM図によって可視化した。

学校と家庭との関係に関して、Adamsらは、その信頼関係を強化する要因として、学校と保護者との「対話の満足度」「対話の頻度」を指摘している²³⁾。露口は、保護者の学校参加が学校に対する信頼向上に寄与することを指摘している²⁴⁾。参観日や各種行事に参加する保護者は、学級、学校を訪問することで、教師を信頼し、保護者と学校との繋がりを形成する。本研究では、【学校へ行く回数の増加】が、SG2である【教師と顔見知りになる】、【教育活動に参観する】の影響を受け、OPPである【学校との繋がり】、【保護者との繋がり】へと至っていた。学校でのボランティア活動を通して、【教師と顔見知りになる】ことで、教師、学校と直接対話する頻度が増え、対話の満足度も向上し、学校と家庭との信頼関係が強化されたと考えられる。また、活動に参加することで、保護者同士の繋がりが強化されたと考えられる。

保護者同士の繋がりに関して、Glassらは、学校支援プログラムにおける高齢者ボランティアの関与により、それまで非協力的であった保護者の学校行事への協力・参画が推進されたと報告している²⁵⁾。本研究では、SG2である【保護者同士で顔を合わせる機会が増える】、【保護者で共通の話題がある】、【一つの部屋に集まる】の影響を受け、【保護者との繋がり】へと至った。本研究においても、小学校での読み聞かせボランティアに参加し、保護者同士で顔を合わせることにより、これまで学校に行く回数が少なく、学校行事等への参加を遠慮がちであった保護者の学校教育への参画

が促進されたと考えられる。

保護者と児童との繋がりに関して、露口は、保護者が地域活動に参加している場合、その児童に対する正の教育効果があることを報告している²⁴⁾。本研究では、【各学年での読み聞かせ】から、SG3である【読み聞かせ前に児童と話をする】、【クラスによる雰囲気の違いに気づく】、【児童を楽しませたいと思うようになる】の影響を受け、【児童との繋がり】へと至っていた。【各学年での読み聞かせ】を経験した保護者は、子供の発達の個人差や発達段階に自然と気づくことが期待できる。また、保護者が【児童を楽しませたいと思うようになる】ことから、読み聞かせボランティアを通じて、学校教育に関心をもち、児童に積極的に関わる気持ちが醸成されると考えられた。

親としてのスキルの獲得期

第3期では、OPP2の【学校との繋がり】、【保護者との繋がり】、【児童との繋がり】から、等至点（EFP）である【ジェネラティビティの獲得】までに焦点を当て、親としてのスキルの獲得に至るまでの対象者の経験をTEM図によって可視化した。

【学校との繋がり】が、SG4である【自分の子どもの状況がわかる】、【我が子に関することも任せるべき時は教師に任せる】、【教師に意見を提案することができる】、【他の行事に参加するハードルが下がる】の影響を受け、【子育ての客観視】、【学校への安心感】、【学校教育の理解】へと至った。

【保護者との繋がり】が、SG4である【学校行事や教師の話ができる】、【子育ての悩みを聞いてもらえる】、【おすすめの絵本を紹介する喜びができる】、【他の学校行事に参加するハードルが下がる】の影響を受け、【学校への安心感】、【学校教育の理解】、【子どもの発達の理解】、【子育ての客観視】へと至った。

【児童との繋がり】が【やりがいや自信に繋がる】、【児童の発達段階の違いに気づく】、【我が子

中心という考えがなくなる】の影響を受け、【子どもの発達の理解】、【子育ての客観視】、【自己の理解】、【自己の客観視】へと至った。

小此木らは、成人期の発達課題であるジェネラティビティは、他者の発達を援助することで発達することを指摘している²⁶⁾。絵本の読み聞かせボランティアは、通常であれば関わりのない我が子以外の児童と継続的に関わることで、まさに他者の発達に関わることの効用が考えられた。また、松村・近藤は、学校活動によるパーソナルネットワークが多い住民ほど、地域に対する態度はポジティブとなる傾向を明らかにした²⁷⁾。本研究では、読み聞かせボランティアを通した【学校との繋がり】、【保護者との繋がり】、【児童との繋がり】により、児童の発達や保護者を支援することで醸成された社会的な役割意識、地域への貢献意識や児童の発達に関わる実感が、ジェネラティビティの獲得あるいは充実をもたらした可能性がある。

【学校との繋がり】、【保護者との繋がり】、【児童との繋がり】から、【学校への安心感】、【学校教育の理解】、【子育ての客観視】、【子どもの発達の理解】、【自己の理解】、【自己の客観視】を経て、EFPである【ジェネラティビティの獲得】へと至っていた。

筆者らもこのボランティアに参加しているが、毎回、読み聞かせ活動後に、A小学校の図書室で行われる振り返り時間には、絵本の話をつきかけにして、保護者同士で学校行事の話、教師の話、クラスの話、勉強について、会話をしている光景が見られる。そこでは、自身の感じたこと、思っていることについて、同じボランティアからの同意や異なる意見や考え方を知ることの効用が考えられた。

本研究の課題

本研究では、ひとつの絵本の読み聞かせボランティア団体を対象に、選択された絵本の集計とその選択理由について検討した。あくまでも事例的な検討であり、全国的に展開されている絵本の読

み聞かせボランティア団体全体の特徴を表しているわけではない。今後、全国規模で、年代ごとあるいは地域ごとに、どのような絵本が選択されて読まれているかについて検証することは、家庭教育学的な観点以外に、日本の社会文化的な様相を明らかにする点でも必要である。

また、今回、ジェネラティビティを等至点として、読み聞かせボランティアの発達の径路について扱った。対象が1人であったことについては、そもそもTEMが持つ特徴として、インタビュー対象者数によってそれぞれ利点が異なることが指摘されている¹²⁾。今後は、対象者数を増やして、絵本の読み聞かせ経験の多様性の理解や径路の類型化を把握する研究が求められる。

参考文献

1. 玉瀬友美「読み聞かせに関する心理的研究の概観」『聖徳大学児童学研究紀要』9, 2007, pp.17-26.
2. 中村年江「絵本の読み聞かせに関する心理学的研究(Ⅱ)ー絵本の読み聞かせが幼児の物語理解に及ぼす影響ー」『読書科学』36 (3), 1992, pp.81-88.
3. 佐藤公治『幼児教育知の探究5ー保育の中の発達の姿ー』萌文書林, 2008.
4. 秋田喜代美・無藤隆「幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の分析」『教育心理学研究』44, 1996, pp.109-120.
5. 泰羅雅登『読み聞かせは心の脳に届く』くもん出版, 2009.
6. 宮澤優弥「学校における読み聞かせに関する研究レビュー」『人文科教育研究』42, 2015, pp.25-33.
7. 文部科学省『子どもの読書活動の推進に関する法律』(http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/001.htm) (閲覧日: 2019年9月30日)
8. 足立幸子・高橋景子「学校における読み聞か

- せについての考察』『山形大学教育実践研究』11, 2002, pp.69-76.
9. 文部科学省『奉仕活動・体験活動の推進方策等に関する中間報告』（ワーキンググループ骨子素案）（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/011201a.htm）（閲覧日：2020年2月6日）
 10. 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀他「都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果」『日本公衆衛生雑誌』53(9), 2006, pp.702-714.
 11. S・ヴォーン, J・S・シューム, J・シナグブ『グループ・インタビューの技法』（井下理監訳, 田部井潤・柴原宜幸訳）慶應義塾出版会, 1990.
 12. 安田裕子・サトウタツヤ『TEMでわかる人生の径路－質的研究の新展開』誠信書房, 2014.
 13. 川喜田二郎『発想法－創造性開発のために』中央公論社, 1967.
 14. 中澤潤・杉本直子・中道圭人「イメージ画に見られる学生の発達, 成長, 成熟の概念の違い」『千葉大学教育学部研究紀要』54, 2006, pp.159-165.
 15. 株式会社絵本ナビ『絵本ナビ』（<https://www.ehonnabi.net>）（閲覧日：2019年9月30日）
 16. 鈴木貴史「保育者の絵本選択における言語表現重視の傾向とその課題－保育者育成課程における絵本ビブリオバトルの実践から－」『帝京科学大学紀要』12, 2016, pp.147-153.
 17. 今満了崇・松村敦・宇陀則彦「子どもの様子に着目したお話会のための絵本選択支援の研究」『日本教育工学会論文誌』35, 2011, pp.109-112.
 18. 八木義仁『『保育内容の研究（言葉）』における読み聞かせの選書理由の傾向』『畿央大学紀要』15(1), 2018, pp.5-10.
 19. 田淵恵「『古い』と次世代を支える心（特集 老い）」『心理学ワールド』82, 2018, pp.17-20.
 20. 丸島令子・有光興記「世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討」『心理学研究』78, 2007, pp.303-309.
 21. 丸島令子『成人の心理学：世代性（ジェネラティ ヴィティ）と人格的成熟』ナカニシヤ出版, 2009.
 22. 宍戸邦章「中高年の地域ボランティア活動促進要因と地域生活満足度－JGSS－2006に基づく分析－」JGSSで見た日本人の意識と行動：『日本版General Social Surveys研究論文集』8, 2009, pp.41-65.
 23. Adams KS, Christenson SL.: Trust and the Family-School Relationship Examination of Parent-Teacher Differences in Elementary and Secondary Grades. *School Psychology*, 38 (5), 2000, pp.477-497.
 24. 露口健司「ソーシャル・キャピタルと教育」稲葉陽二・大守隆・金山淳他『ソーシャル・キャピタル「きずな」の科学とは何か』ミネルヴァ書房, 2014.
 25. Glass TA, Freedman M, Carlson MC, et al.: Experience Corps: design of an inter-generational program to boost social and promote the health of an aging society. *Journal of Urban Health* 2004, 2004, pp.94-105.
 26. 小此木啓吾・濱田庸子・山田康『＜次世代を育む心＞の危機－ジェネラティビティ・クライシスをめぐって』慶應義塾大学出版会, 2014.
 27. 松村暢彦・近藤慎「小学校の保護者活動が社会的ネットワークの形成と生活満足度に与える影響」『土木学会論文集D3(土木計画学)』72(5), 2016, pp.I_1009-I_1016.